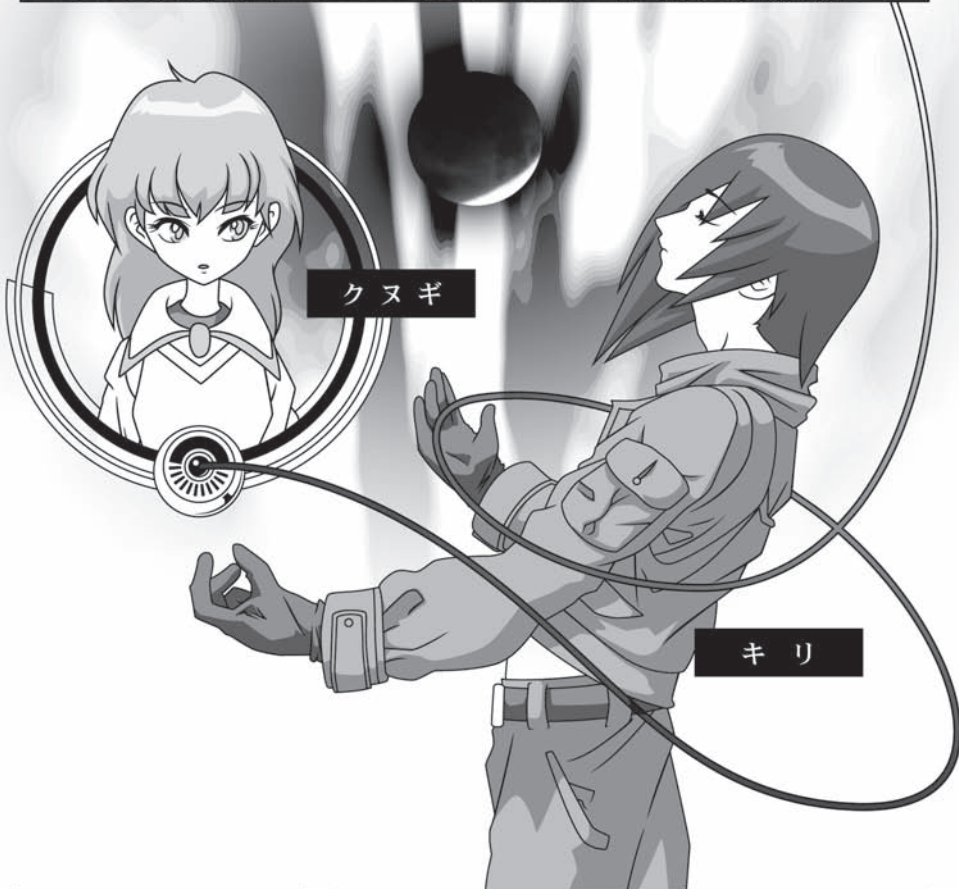


【登場人物一覧】



クヌギ

キリ



保険医



ツタ



カエデ



そして僕は
世界
になり

水池
巨

戦いは静かに始まる。

少しでも足音を立てれば、息を荒げれば、それが自分の居場所を示す格好のサインになってしまう。だから僕は息を潜め気配を殺し、自分のサインを極力出さないように忍ぶ。そして五感の全てを集中させて敵のサインを探る。僕には盾役がないのだから、そうしなければすぐに永眠ねむらされてしまう。

敵のカップルを発見すると、僕は『世界』を投げつけるイメージを練る。目を三秒瞑り、腕を前へ突き出して深く息を吸う。そして目を開ければ僕は槍を手にしている。細長く尖ったそれをまずは盾役の少女へ向かって鋭く投げる。物質としての槍はもちろん存在してはいない。それでも僕には確かに槍が相手の体を貫く光景が見える。こちらに全く気づいていなかった少女は一瞬だけ驚いた顔をす

クヌギが永眠ねむっている。

真白のベッドに横たわり、真白の病院服を着せられて、クヌギは永眠ねむっている。苦しうに歪める顔が痛々しい。彼女が苦しむ姿など本当は見えていたくはない。でも見なければならぬ。この目でしっかりと見つめて、自分も彼女と同じ、否それ以上の苦しみを味わわなければならぬ。何故ならそれが僕の受けるべき罰だからだ。

しかし僕に彼女の苦しみを感じる事はどうしてもできない。彼女の苦しみは殆ど永遠に近いものなのだ。だから僕はせめて、自分が彼女を地獄へ突き落としてしまったのだという罪を決して忘れない様に自らの心に深く刻み付ける。何時如何なる時その傷が僕を痛め付け続ける事を期待して。

僕は見る。彼女の歪んだ顔をじっと眺め続ける。

一時間ほどして僕は病室を出る。入り

るとそのまま永眠ねむり倒れる。ドサリという音でパートナーがやられた事を知った少年は青ざめる。盾を失った男子は素早くその場から逃げるのがセオリーだ。その少年も例に漏れず慌てふためいて逃げようとする。

遅い。

サツと少年の目の前に出て僕は退路をふさぐ。少年の顔を間近で見れば、敵を最初に発見した瞬間から殆ど判りきっていた事実を確認する。

この男はアイツではない。

投げた槍がさくりと刺さり少年は倒れる。僕はその場を素早く去る。

周りでは場が荒れ始めている。静かだったはずの戦場から様々な音が溢れだす。人が倒れる音。逃げる足音。叫ぶ声。そんな音を出してしまう兵士は戦いが上手いとは言えない。けれども軍隊の大部分は戦いの上手くない人物で構成されているのだ。手練の兵士はパートナーに意思を伝えるのに声など用いない。身振り

口のそばにいる看護婦と目が合うが言葉は交わさない。交わすべき言葉は遥か昔に尽きてしまっている。毎日顔をあわせているのだからそれも当然なのかもしれない。

どうでもいい事だ。

*

十四才から十九才までの少年少女のうち約一%の人間は脳の中に『世界』を作り上げているという事が判明したのは今から二十五年前の事だった。

代わり映えない平和なある日の午後三時、とある中学校において二年生のなかよし男女五人組はトランプに興じていた。途中までは特に問題もなく勝負は進んだが、三回続けてビリになった少年が何の根拠もなく「卑怯だぞ！」と叫んだ事で状況は一変した。彼に非難を浴びせる者、彼を擁護する者、彼に無関心な者が入り乱れ、小さな火種は大きな炎へと

や目線だけで通じ合う事ができるのが本物のカップルだと言える。僕にそんな心配は必要ないけれど。

退却の号令がかかり、今日の戦いが終わる。僕は敵のカップルを七組永眠ねむらせれば。普通の隊員なら三組永眠ねむらせれば万々歳だから、これは客観的に見ればすばらしい戦果だと言える。

「今日は七組か。やっぱりキリはすげえな」

仲間から賞賛を受けるが喜びの感情は全く沸き起こらない。ただ、今日もアイツを見つける事のできなかった悔しさと焦りだけが僕の心を支配している。

一刻も早くアイツを永眠ねむらせなければいけない。

それが、今の僕が生きる理由の半分なのだから。

*

発展した。しかしそこまではよくある事だった。

いつもと違うのは結末だった。

教師が駆けつけた時、既に事は終わっていた。床には三名の男女が倒れ、一名の男子が錯乱し泣き喚き、もう一名の男子は口をバクバクさせながら呆然と立ち尽くしていた。即座に救急車が呼ばれた。倒れた三人は顔を苦しうに歪めてはいたが、すっかり息をしていたし脈も正常だった。しかし意識だけは何時まで経っても不明のままだった。医者たちは全力を尽くしたが原因すら不明。主治医によれば、「どう調べてみても、この少年たちはただ眠っているだけにしか見えな」との事だった。彼らは一年後に息を引き取った。

「みんな死ねばいいと思ったんだ」

残った人物のうち一方、口論の火種を作り、発見時泣き喚いていた少年は事件の状況を聞かれてそう話した。もう一方の少年は「何がなんだかわからないうち



にみんな倒れはじめた。わからない。ぼくは何もやってない」と話し、その後事件のショックにより二ヶ月間学校を休んだ。

この事件はただの始まりにすぎなかった。

全国、いや全世界で同様の事件が相次ぎ、大きな社会問題へと発展した。流石の政府も黙って見ているわけにはいかなかった。事件は詳細に調査された。そして幾つかの共通点が判明した。

- ・事件の当事者であり、かつ倒れる事のみであった人物は多くの事例で二名以上である事や、二名以上である事は少ない。
- ・残った人物はほぼ例外なく男性である。
- ・残った人物の多くは事件当時、倒れた相手に対して敵意を抱いている。
- ・二名以上が残った事例に関して、片方の人物は複数の女性に好意を寄

政府の対応は早かった。被害をなくするためという名目で、国民には、十四才になり次第の機械による検査を受ける事が義務付けられた。そして『世界』が現れた少女少女は政府が管轄する学校へ強制的に転校させられた。学校？ 確かにそこは学校ではあった。頭に『軍事』の名が付く巨大な学校。

そう、政府は彼らの能力を軍事的に使用する事を思いついたのだ。

*

僕がこの学校に転校すると決まったとき、父さんも母さんもシクシクと泣いていた。両親のそんな姿は見た事がなかった。僕が驚いた。と同時に不思議にも思った。僕が泣くのならともかく、何故母さんたちが泣かなければならないのだろう。全寮制の学校だから、僕は両親と五年間離れて暮らさなければならぬ。それが悲しいのだろうか僕は結論付けた。

せられる、いわゆる『モテる』タイプの少年である事が多かった。

これらの事実を元に政府が出した結論は、加害者である少年が被害者に対して何か精神的な攻撃を仕掛けた、という事と、その攻撃の手から自分が好意を寄せた少年を護った少女が存在する、という事の二点だった。この推測を元に最初の事件を調べなおしてみると、やはり、被害者の少女一人が残った少年の内の後者に対し好意を寄せていた事が複数の証言により判明。実証の一つとなった。

政府は早速、容疑者と思われる少年たち、そして攻撃を防いだと思われる少女たちを集め、隔々まで調査した。彼らの年齢は押しなべて十四〜十九才であり、それ以上も以下もいなかった。様々な手法で彼らは調べつくされた。けれども一向に手がかりはつかめなかった。

当時、国内最高峰の大学で『脳の中身を三次元的に見る事のできるコンピュー

僕自身にとっては転校はそんなに悲しい事ではなかった。もともと地元の友達が少ない方だったし、両親の存在が鬱陶しくなってきた時期だったから、むしろ自由に暮らせる喜びのほうが大きかったのかもしれない。

両親の涙の本当の理由が分かったのは一年後、初めて戦場に出撃した時だった。

僕の部隊はこつ酷くやられた。事前の訓練や実践演習など何の役にも立たなかった。三分の二の隊員が永眠ねむらされた。僕が生き延びる事ができたのはただ運が良かったのと、そしてクヌギのおかげだ。僕にはただ闇雲に逃げ回っている事しかできなかった。永い永い（と僕は感じた）が実際はどうだったか分からない）戦闘が終了し基地まで戻り、顔見知りのクラスメイトたちが続々と担架で運ばれて来るのを見て、僕は両親の涙を脳裏に描いた。

あの涙は五年の別れに対するものではなく、永遠の別れに対するものだったの

ター』というものが丁度発明されたばかりだった。人間の無意識を視覚的に確認する事ができるとあって、世紀の大発明だと話題を呼んでいた。政府は苦肉の策としてこの最新鋭の機械を使用した。すると一つの事実が浮かび上がった。

この機械を通常の人間に使用した場合、出力される映像はまさしくカオスといった状態であり、何がどの様に構成されているのかは一見ただけでは全く分からない。しかし件の少年少女たちは違った。彼らの映像は、例外なく一つの『世界』としてきちんと整っていたのだ。そして更に驚くべき事に、被害者にこの機械を使用したところ、加害者と全く同じ『世界』が出現したのである。

一連の調査を受けて政府が発表した声明は次のようなものだった。

「非常に信じがたい事ではあるが、被害者の少年たちは加害者の放った『世界』に捕らわれ、目覚める事ができないと考える他はない」

だと、その時僕は知った。

*

「あなたたちの能力は男女で二つに分けられます」と、その女教師はまるで数学の問題を解いているかのように話した。

「男子の能力は、いわゆる矛のようなものです。矛とは、まあ槍のような武器だと思ってください。この矛で、あなたたちは人を攻撃する事ができます。攻撃を受けた人間は永眠ねむってしまいます。この永眠ねむりは通常の眠りとは大きく異なります。あなたたちの脳の中にある『世界』が矛であり、『世界』をぶつけられた人間はその『世界』に捕らわれて昏睡し死ぬまで目覚める事はありません。だから『眠る』ではなくて『永眠ねむる』なのです」

そこで教師は黒板に大きく『永眠ねむる』と書いた。

「通常永眠ねむらされてしまった人間は、いくら延命措置を施しても一年ほどで亡く



なつてしまいます。原因は未だ不明なのですが、おそらく脳が持たないのだろうと推測されています」

教師は言葉を切った。生徒たちはざわざわと騒がしかった。

「はい、重要な事なので、こつちを向いて静かに聴いてくださいね」

うつむいて話を聴いていた僕はその言葉で顔を上げた。女教師は微笑んでいた。

「女子の能力は男子とは全く逆です。例えるなら盾です。盾は分かりますよね。女子は男子の放つ攻撃を防ぐ事ができるのです。ただし、ここが肝心ですが、女子は自分の身を護る事はできません。この能力は人に自分の持つ『世界』を与える事で初めて力を持ちます。ですから、女子は他人は護る事ができても、自分は護る事ができないのです」

そこで一人の男子が手を挙げた。「先生。オレよくわからないんですけど、結局オレらはこの学校で何をすればいいんですか」

どうして僕がクヌギとペアになれたのだろうと疑問だったが、後で聞いた話によればこれは相性によるものらしかった。カップルはできるだけ相性の良い者同士で組まれるのだという。そういうえば入学のとき膨大なアンケートを受けさせられた覚えがある。あんな子供だましみたいなものでパートナーが決定してしまうのか。

理由がどうあれ幸運である事に間違いはなかった。クヌギの力のおかげで僕が戦場で永眠ねむらされる確率はぐんと低くなる。敵を永眠ねむらせる事はできないかもしれないけれど、とにかく死にはしないのだから安心だ。そう僕はのんきに考えていた。

クヌギは相変わらずの無表情で毎日を通っていた。淡々と訓練をこなし、淡々とご飯を食べ、淡々と眠った。始終を共にするパートナーの僕から見ても、彼女には何の感情も存在しないように思えた。太陽の照りつける夏のある日、僕たち

僕も同じ事を考えていた。彼は、この学校が普通の学校ではない事に感づいているようだった。

教師は微笑みを絶やさずに言った。「質問は受け付けません」

教室がさらにざわめいた。「ちゃんと聞かないと死にますよ」

一瞬にしてクラスが凍りついた。淡々としたその口調には真実の響きが確かに混じっていた。

「詳しい事はだんだん分かってきますから。今は、男子が攻撃役で女子が防御役、まずはこの事を覚えておいてください。それでは、みなさん隣に座っている人を見てください」

僕は右に座っている少女と顔を合わせた。彼女は小柄な僕よりさらに頭一つ小さく、そして綺麗な黒髪を肩まで伸ばしていた。おそらく一般の基準に照らしあわせてもかわいい部類に入るだろうと僕は思った。ただしそれは彼女が微笑んだとしたらの話だ。彼女は全くの無表情

は外庭のベンチに腰掛けて昼休みを過ごしていた。本当は他の仲の良い友人たちとサッカーでもして遊びたいところだったけれど、クヌギと一緒にいるところを教師にでも見つかつたら、あとで酷い説教を受けるのはわかりきった事だった。まだ戦場に赴いた事のなかった僕は、もっと活発で一緒にサッカーをしてくれる女子がパートナーだったら楽しかったのに、なんて無責任な事をぼんやりと考えていた。

ふと脇腹に違和感。

クヌギが僕の脇腹をつついていた。

「あれ見て」

いつもどおりのぶつきらぼうな言い方と共に、彼女は向こうの方を指差した。見るからにやんちゃな上級生が花壇を足でぐちゃぐちゃに荒らしていた。パートナーの女子はそれを見ても愉快そうに笑っている。

「キリ、あいつ、攻撃して」
淡々とクヌギは言った。

をしていた。

「はい。その人がパートナーになります。矛盾の男子は盾役の女子を護る。女子は逆に男子を攻撃から防ぐ。あなたたちはこのようにお互い護りあって戦う事になります。これからは二人一組のカップルとして行動してください。いいですねでは、挨拶をしましょう」

僕は隣の少女の瞳を見つめた。この娘がパートナー、だって？

先に話しかけてきたのは彼女だった。

「クヌギ」

「え？」

「私の名前。クヌギ。よろしく」

無表情のまま、彼女はそう言った。

*

クヌギの力は凄まじいものだった。殆ど全ての攻撃を無効にする事ができた。対して僕は全く平凡な力しか持っていなかった。動きもそれ程良くはなかった。

「ええ？ 無理だよ」

「いいから」

「規則知ってるだろう。そんな事したら僕らだつて酷い目に遭う」

「いいから」

「駄目！」

「いいから」
こんなに強情なクヌギを見るのは初めてだった。

彼女は不意に会話を止めると立ち上がり、花壇の方へ歩いて行こうとした。僕はあわてて引き止める。揉め事を起こすのはよろしくない。尚も花壇へ向かおうとする彼女を押し止めるうちに、上級生カップルは花壇いじりをやめてどこかへ行ってしまった。

二人で花壇に近寄った。先ほどまで可憐に咲き誇っていた花たちが今は見るも無残に折れ曲がっている。

「……かわいいそう」

しゃがみこみ、無表情のまま折れた花の茎を人差し指でさするクヌギを見て僕



はホッと心温まる気持ちだった。その姿が、これまでの感情を持ち合わせていないかのような姿ではなく、普通の少女のそれだったからだ。

しかし僕は次の瞬間、その印象が思い込みに過ぎないことを知った。
クヌギは折れ曲がった花を両手で包むと、くしゃりと握りつぶした。

嘩然と見つめる僕に気づいた彼女は言った。

「もう、元には戻らないもの」

この出来事があったから僕はなるべくクヌギを理解しようと勤めた。クヌギは今まで考えていたような感情のない少女ではない。それがはつきりとした今、僕の中にクヌギは実際はどのような少女なのかを知りたいという欲望が生まれていた。

きちんと彼女のことを見ていれば、彼女が日常において様々なサインを出していることがわかる。手のちよっとした仕

その日の自室の掃除当番は僕だった。ほうきで床を掃いていると、とても小さなクマのぬいぐるみが落ちていた。ポロポロで今にも縫合が外れてしまいそうだった。僕はそれを単純に「ゴミだと捉えた。ゴミ箱の中に放り込むとそのまま焼却炉へ持っていく」

「ねえ、クマのキーホルダー知らない？」
その夜、クヌギは僕にそう尋ねた。珍しいことにクヌギは慌てているようだった。

「え、あれクヌギのだったの？ ごめん捨てちゃった」

それを聞いたクヌギは目を見開くと、突如として叫んだ。

「捨てた！？ 何で！ 何でそんなことするのよ！」

驚いた。あれがクヌギにとってそこまで重要な物だとは思っていなかった。というより、クヌギには重要な物なんて何一つ無いように感じていたのだ。それまでは。

種、瞳の動き。そういった些細な動作は、実は彼女の感情を最もよく表すサインなのだ。僕はようやくそのことに気づいた。今までの僕は彼女の表面しか見てはいなかった。

僕は積極的にクヌギと会話するようにした。彼女が饒舌になることはもちろんなかったけれど、少しずつ言葉数は増えているように感じた。無表情はいつまでたつても変わらなかった。しかし、彼女のサインが分かり始めた僕には表情なんでもはや重要なものではなかった。

訓練の成績も次第に上がっていった。パートナー同士の信頼は戦いにとって何よりも重要なのだということをもっと知った。相手を信頼しているかしないかでまるで動きが違うのだ。常に二人でいると口をすっぱくして教師が言うのも頷けることだった。まあ、それでも僕の動きは機敏とは言えなかったけれど。

「ごめん！ クヌギの物だなんて思わなかったんだ」

「嘘。だってこの部屋にはキリと私しかないのよ。気づかないわけじゃないじゃない」

その通りだ。僕はあれがクヌギの物だと気づけただけだった。しかし僕は実際は気づけなかった。パターンの決まった生活の中で気が緩んでいたのだろうか、今になって思う。

「本当にごめん」

「だめ。許さない」

クヌギはありとあらゆる言葉で僕を非難した。クヌギの中にこんなに強い感情があることに驚くと同時に、身勝手なことでだが、自らの中にふつふつと怒りがたまっていくのを僕は感じていた。元ほといえはクヌギが落としたのが悪いのだ。

「そんなに大事なんだったら机の奥にでもしまっとけばいいだろ！」

「そんなことできるわけじゃないじゃない！」

*

戦場に赴くようになってからも僕らのコンピネーションは上々だった。特に身を護ることに関しては同期の中でもトップクラスと言えた。僕はクヌギのちよつとした動作を見るだけでその意図をつかめるようになっていたし、彼女の感覚はもともと鋭かった。僕らはとても静かに、敵の間を縫って動き回ることができた。もちろん彼女の類まれな能力が大いに役立つたのは言うまでもない。

僕たちは帰還するたびに仲間から賞賛され、教師から褒められた。

そして僕は調子に乗った。

周りからの言葉にのぼせて浮かれてクヌギのことに以前よりも注意を向けなくなってしまうていたのだと思う。

明日が出撃だという夜、僕はクヌギとケンカした。初めてのことであった。

悪いのは僕のほうだった。

「なんでだよ！ 大体、あんなポロポロのぬいぐるみ、捨てたって問題ないじゃないか」

数瞬後、僕は自分の吐いた言葉にひどく後悔させられることとなった。

クヌギは泣いていた。

「だって、だって生きてた。ポロポロだけ生きてたのよ！」

その言葉の意味は、ついに僕には理解できなかった。

今もまだわからない。

次の日、雨の降りしきる戦場で僕は、敵を倒そうと彼女の制止を振り切って飛び出した。

彼女は能力の使いすぎで明らかに疲れていた。こういう時はどこかの茂みに隠れて休むべきだ。しかし僕はそうしなかった。偶然、敵のカップルの後姿を見つけたからだ。彼らはこちらには気づいていないようだった。

(あいつら、倒してくるよ)



(あぶない)

(大丈夫だつて)

気づかれないように近づいてまず盾役の女子を。そして男子。隙を突けば大丈夫だと僕は踏んだ。昨日のケンカが頭の中にあったのかもしれない。その時は自分は一人でも大丈夫だと、何故かそう考えていた。

馬鹿なことをしたと今になって思う。

僕は雨に乗じて静かに静かに彼らの背後へと近づいていった。

はずだった。

パキリ。

嫌な音が響いた。枯れ枝を踏んだのだ。

彼らは同時に振り向いた。

まずい。

まずい。まずい。まずい。

クヌギ。クヌギはどこにいる。

疲れている今のクヌギの力では敵の攻撃は防げないだろう。でも、それ以外にどんな方法がある？

敵の行動は早かった。すでに攻撃態勢

に入っていることが分かった。

体の芯が冷えてゆく。足が動かない。動けという命令が脳から送り出されない。終わるのか。僕はここで永眠するのか。いやだ。やめてくれ。誰か助けてくれ。

左から唐突に物理的衝撃。

何が起こったかわらないまま僕は吹っ飛び、ぬかるんだ地面に倒れこんだ。反射的に左を向く。

クヌギがいた。

一瞬だけビクンと体を痙攣させると、クヌギは倒れた。

何だ？

何が起こったんだ？

どうして僕でなくクヌギが倒れているんだ？

「おい」

声が出たほうへ僕は振り向いた。敵の男が目の前にいた。

「おまえ、何で逃げない」

何を言っているのかよく分からなかった。た。

逃げる？ どうして？

「まあいい。見逃してやる。ちょっと疲れてるしな。ありがたく思えよ」

彼はそれだけ言うどパートナーと共に何処へと消えた。

僕はぬかるんだ地面にへたり込みながらクヌギの顔を眺め続けた。

仰向けに横たわるクヌギの苦しそうな歪む顔を雨が叩き続けていた。

その夜、真暗な二人部屋で一人座り込みながら僕は考えた。

クヌギは、何故僕を助けてくれたのだろうか。

いくら考えても答えは出なかった。自分はクヌギの気持ちに全く理解できていなかったと思ひ知らずとした。

そして僕は決めた。

クヌギを永眠させたアイツ。あの男をこの手で永眠させる。

それがクヌギに対するせめてもの謝罪だ。

それまでは、僕は絶対に生き延びる。生き延びてみせる。

*

クヌギが永眠した次の日にはもう新しいパートナーが決まっていた。丁度男子だけが永眠らされてしまったカップルがいたらしい。カップルが永眠らされる時は両方ともであるのが普通だ。片方だけ残ったカップルが同じ戦場に二組も存在するなんてことは滅多にない。運が良いのだから悪いのだから、僕には判断がつかなかった。

彼女はカエデと名乗った。彼女もパートナーを失った直後のはずなのに、彼女がショックを受けているようには、少なくとも僕には見えなかった。

「平気なの？」

「何が？」

「いや、パートナー、永眠っちゃったんでしょ？」

「だって戦争じゃない。そんなこと、初めから覚悟してたよ」

こともなげに彼女は言った。彼女は強いな、と僕は思った。

僕は弱い。嫌になるくらい弱い。

彼女との最初の出撃。僕はできるだけ良いカップルになろうと勤めることにした。アイツを永眠らせるまで僕は永眠るわけにはいかない。そのためにはさらに強くなる必要がある。強くなって、敵から身を護り、時には倒し、そうやって生き延びていかねばならない。そのためには良いコンビネーションが不可欠だと考えていた。カエデを利用してはようど少し悪い気もしたけれど。

敵を発見する。二人で忍び寄る。カエデの『世界』に護られて、敵の背後に飛び出す。

おそろしいほどの恐怖が僕の背中を撫でた。

何百人もいる敵の軍隊の真ん中に一人

で立たされているような恐怖。

二人で戦っているという感覚が全くなかった。僕らはただ二人同じ場所で戦っているだけだった。

僕とクヌギが戦っていた時、僕らはもはや一人の個人ではなかった。一つの生命体である『カップル』として戦っていた。だからこそ僕は安心して戦い抜くことができたのだ。

つまり、あの安心感を知ってしまった僕には、もうクヌギ以外の誰かとカップルにはなれないのだ。

僕は気づいた。気づいてしまった。

僕はカエデの手をつかむと走って逃げ出した。敵のいないところまで一気に走って、茂みに隠れて一息ついたところでカエデに頭を叩かれた。

(ちよっと！ なにやってるのよ！)

(だめなんだ)

(何が)

(カップルを解消しよう)

(いきなり何言ってるの)



(僕はもう誰もカップルは組めない)

(バカじゃないの!?)

(しかたないんだよ)

(じゃあこれからどうするの? 一人で戦うとでも言うわけ?)

(うん)

勢いで言ってしまったから僕はハツとした。考えてみればそうするしか僕の道はないのだ。

(もう、勝手にすれば!)

口調は激しかったけれど、何故か彼女は怒っているように見えなかった。

(でも、今日だけは一緒に戦ってよね)

それが彼女の最後の言葉だった。

唐突に彼女は身体を硬直させるとその場へ倒れる。

まさにその瞬間、撤退の合図が鳴り響いた。

どうして。

どうして僕の周りは無駄な永眠りに溢れているんだ!

なら納得がいく。

「みんな笑ってるぜ。英雄ツタの真似でもしようってのか、つてさ」

やつぱりか、と僕は思った。はじめから理解されようという気などさらさらなわけではないえ、気分はどうしても悪くなる。

「私は笑わないけどね」

僕は彼の顔を見つめなおした。その言葉の中には、軽い調子に包まれながらも、真剣な響きが確かに存在していた。

「何か事情があるんだろう? じゃなきゃわざわざ自ら死に行くようなことは人間はしない。そういう風に人間はできているからね」

「まわりくどい言い方ですね」

「どこが。ストレートで論理的じゃないか。私は論理的な考え方じゃないんだよ」

「全然論理的じゃない気がしますが」

「口答えしてると見てやらないよ。ほら、こっちに來て」

「え?」

*

初めて一人で出撃したとき、僕は何もすることができなかった。ただ敵から身を隠し逃げ惑うだけの存在だった。しかたがない。最初はとにかく実戦経験をつむことが重要だ。そう自分に言い聞かせるけれど無力感は消えない。挙句、退却時に転んで足をひどく擦りむいてしまった。

情けない。

傷が痛むので僕は保健室へ行くことにした。本格的な傷を治すところはもちろん別にある。こちらの方は小さな傷や軽い体調不良などを治療する、まさに学校の『保健室』といった場所だ。保健室に入るのは初めてだった。

「失礼します」

「ああ、ちょっと待ってて」

若い男がズルズルとカップラーメンを

「えじゃないよ。その足の怪我を治しに來たんだろ。近づかなけりゃ治療なんてできやしない」

「なるほど。それは確かに論理的ですね」

僕と保険医は一緒になって笑った。彼になら僕の心の内を打ち明けられるかもしれない。ふとそんな考えが浮かんだ。

*

英雄ツタ。

彼の名前は軍内に伝説としてとどろいている。

彼が伝説となっている理由。

彼はたった一人で考えられないほどの数の敵を永眠させたのだ。

その動きは人間業とは思えないほど機敏。その感覚は蟻の動きを察知できるほどに先鋭。その『世界』は常人を遥かに超える強度。

常に鍛錬を怠らず自らの力を磨き上げ

すすっていた。白衣は一応着てはいるが、とても医者には見えない。

「あの、保険医の方は……」

「だから、ちょっと待ってて言ってるじゃないか」

彼は心底美味そうにラーメンの汁を飲み干すと僕のほうへ向き直った。

「お、君はキリ君じゃないか?」

「え、ええ……そうですけど、なんで」

「なんで知ってるかって? そりゃあ知ってるさ。僕は全校生徒を覚えてるからね」

僕は露骨に怪訝な顔をした。この学校の生徒は万を超える。全員なんて覚えられるわけがない。

「そんな顔をするなよ。冗談だよ冗談」

彼は軽い口調で言うとはははと笑った。「本当はね、君は教師の間じゃ有名なんだよ。カップルになるのを拒否する生徒なんて滅多にいないからね」

「ああ」

ようやく僕は理解した。確かに、それ

ていくストイックさも、彼を伝説たらしめる要因の一つになっている。

しかし、現在彼は戦場にはいない。

教科書には「不慮の事故により亡くなったしまった」とだけ記されている。

彼がパートナーを作らず一人で戦い抜いた理由は謎とされている。

*

訓練室に入るには受付が必要だ。殆ど毎日訪れているから受付担当のおじさんも僕のことともうよく知っていて、生徒証を見せる必要もない。初めて訪れたときは露骨に変な顔をされたものだ。無理もない。そもそもこんなゲームのような機械訓練(二十年をかけて造り上げた最新鋭の機械だと保険医は言っていたけれど)を授業以外で行いたいと思うような生徒からして稀だし、それに行うにしても普通はカップルで訪れる。一人で訓練室に入るなんてことはまずないと言って



いい。

訓練は二つ存在する。一方は体を鍛える訓練。もう一方は脳を鍛える訓練。そう僕は考えている。本当にそのとおりなのかどうかは知らない。

一つ目の訓練が始まる。そこかしこから放たれる敵の攻撃を横したビームを僕は機敏にかわしてゆく。攻撃はしない。通常は決められたポイントを全て攻撃し尽くしたら訓練終了となる。女性に護ってもらいながらの訓練だから避けることもあまりしなくてよい。つまり本当は攻撃重視の訓練なのだ。しかし僕の戦い方はそんなカッパルでの戦い方とは何から何まで違う。まず僕に求められることは永眠^{ねむ}れないことだ。永眠^{ねむ}れば全てが終わりだ。それだけは絶対に避けなければならぬ。少なくとも、目的を達するまでは。五感をフルに活用し、機械がビームを放つ些細な音、気配を感じる。ビームが放たれるよりも一テンポ早く動き、常に安全地帯へと身を移す。避ける際はどこ

部屋から出ると受付のおじさんが話しかけてくる。
「いやー、すごいね。さすが英雄ツタの再来と言われるだけはある」
「本当に僕はツタと同じ力を持っていると思いますか？」
「あ、いや、そりゃあツタはすごかったから……」
「さようなら、おじさん」
僕はその場を去る。
英雄ツタ。
僕は彼のようにならなければならない。

*

僕は初めて保険医と出会ったあの日から、毎日保健室へと通った。もちろん毎

かに必ず存在している。それを一瞬でも早く見つける。実戦と全く同じ。そうでなければ意味がない。

一時間びつたりで訓練は終了する。今日も、一度も当たらずに終えることができていたものだ。成長を感じる。

十分間の休憩の間には精神統一をする。目を瞑り、息をゆっくりにし、座禅をして手を御腕型に組む。そうして、できるだけ脳の内部をからっぽにしようと努力する。この後訪れる訓練のために、少しでも脳を休ませようという考えから行っているものだ。効果があるかどうかは不明だが、もはやある種の儀式として、瞑想をすることが習慣になっている。

二つ目の訓練では、例の脳内映像化コンピュータを元に開発した機械を用いる。大きなディスプレイの前に座り、画面上に文字で表示された言葉をできるだけ早く、かつ詳細に頭の中に具体的なイメージとして思い描く。表示される言葉

日怪我していたわけではない。保険医と語り合うために、僕は保健室へ赴いた。僕は保険医に好感を抱いていた。彼は他の『お堅い』教師たちとは全く違うと言っていたよ。

それに、正直に言えば僕はクヌギが永眠^{ねむ}ってしまったから、級友と会話するのが苦痛になっていたのだ。クラスメイトたちは今の僕にとっては生ぬるい存在でしかなかった。死に直結する戦闘に赴かねばならないはずなのに、彼らの顔はどこかふぬけていた。結局彼らは「自分が永眠^{ねむ}るわけではない」と根拠のない自信を抱えて出撃しているのだ。おそらく彼らは自分が永眠^{ねむ}るその瞬間でさえ、自分は助かると考えるのだろう。そのことに僕は気づいたのだ。

いったん気づいてしまったら、彼らと会話する気力はもうわきあがっては来なかった。話をあわせる気にすらならなかった。僕にそんなことをしている余裕はなかった。友人はみな去った。クラス

は様々だ。『バナナ』といった比較的容易に想像できる言葉から『空気』といったイメージにくい物体、果ては『冷たい』などという形容詞までが表示される。思いついた映像は画面上に映し出される。もちろん正解はない。そもそもこんなことをして本当に自分の『世界』がより強固なものになるのかどうかはわからない。生まれ持った才能にはかなわないのかもしれない。でもやらないよりはましだ。

訓練を終えると体も頭もへとへとに疲れきっている。心地は良い。この疲れに浸ることで、僕は自分が背負っている、あるいは背負おうとしている何もかもつかの間忘れる。忘れてしまつて、心地よさに甘えてしまつて、そんな自分に気づいて失望する。そして一瞬たりとも忘れてはならないと自分を戒める。何度も何度も繰り返されるパターン。

人間には休息が必要だ。一時も緊張を緩めずにいればいつか消耗し無くなってしまう。それはわかっている。でも、そ

の中で僕は孤立した。望むところだった。保険医も僕に好意を持ってくれているらしく、僕を快く歓迎してくれた。彼の会話は愉快で、得るものも多かった。医学的な知識はもちろん、どの教師とどの教師が付きあっているのだの、あの厳格な教師は昔不良だったのだといった内部事情、そして少し危険な軍内の秘密。彼の話は広範囲に及んだ。

すっかり保険医と仲良くなったある日。僕は彼に、僕の抱える事情の全てを話した。クヌギとの出会い。別れ。カエデとの決別。一人で戦おうと決心したこと。今の僕が生きる目的。

話を終えると、保険医は独り言のようにつぶやいた。
「……驚いたな。ツタとそっくりじゃないか」
「確かにそうですね。僕も一人で戦っていますし」
「いや、そうじゃない。そういうことではないんだ」



それだけ言うと彼は黙り込んだ。何かを深く考えこんでいるように見えた。

「よし！」

何かを吹っ切るように言うと、保険医は僕の瞳を見ながら、いつになく真剣な口調で話し始めた。

「これから僕は君に、ある一つの重大な軍事機密を教えようと思う。今まで教えてきたようなチンケな秘密じゃあない。もし私がこの機密を君に漏らしたことがばれたら、私の身は無事ではいられないだろう。もちろん君もだ。そんな危険を犯してまでこの秘密を教えようとするのは、それが君にとつて有益なことに違いないと確信しているからだ」

「……なんで先生はそんなに僕に良くしてくれるんですか？」

「君は、人間としては珍しく、とても真剣に生きようとしている。見ていれば分かる。真剣に生きる人物を人間は放っておけない。そういう風に人間はできているのさ。論理的にね」

らだ。はたから見ても、彼らが強い信頼で結ばれていることは手に取るようだった。彼らは無敵のカップルだった。

そのはずだった。

ある戦場でツタはナツを担いで基地まで戻ってきた。ナツは永眠ねむらされていた。何があったのかは誰にも分からなかった。ツタ本人が一切語ろうとしなかったからだ。ツタは、ただ無表情で病棟へ運ばれるナツを見つめ続けるだけだった。

それからツタは変わった。それまでの陽気な性格は影を潜め、一人で部屋に閉じこもることが多くなった。笑顔も滅多に見せなくなった。挙句の果てには他のパートナーと組むことすら拒否した。訓練も全て一人で行い、戦場にも一人で行くと言つて聞かなかつた。賞賛の対象だったツタはもはや嘲笑の対象だった。誰もがツタはもう駄目だと考えた。

だけどそうじゃなかった。

そこから先は君も知っているとおろさ。獅子奮闘の活躍を見せた彼は英雄として

保険医は薄く笑つた。

「覚悟はいいかい？」

「はい」

即答した。

「よし。それじゃあ行こうか」

保険医はおもむろに立ち上がった。

「行くつて、どこに？」

「ツタのところさ」

彼はこともなげに言った。

「ツタはまだ死んじやあいないんだよ」

*

保険医は早めのペースで黙々と歩いてきた。黙つてそれについて行く。いくつもの階段を降り、いくつもの扉を開けて、僕たちはそこにたどり着いた。

物々しい自動ドアがそびえ立っている。保険医は何かのカードを横の機械に差し込んだ。ガスの抜ける音と共に扉が開く。

ゴテゴテした医療機具に彩られて、二

崇め奉られるようになった。本人は他人の反応なんてどうでも良かったみたいだけどね。

ここからが重要なところだ。

ある日、ツタが永眠ねむるナツの隣で倒れているのが発見された。一見するとツタは永眠ねむつているように見えた。医者たちはすぐに原因を調査した。例の、『世界』を三次元化する機械、覚えているだろう？ あれをツタに使用すると驚くべきことが分かった。

ツタの『世界』はきれいさっぱりなくなっていたんだ。

あの、強固で広大な『世界』はどこにも見られず、それどころか一般人ですら持つているカオスのような『世界』すら発見できなかった。

なぜこんなことになったのか。いくらツタを調べても原因は全く分からなかった。お手上げの医者たちは、今度はナツを調べることにした。ツタが倒れていたときそばにいたのだから、ナツにも何か

人の人物が眠っていた。一人は英雄ツタだ。教科書に載っていた顔そのままに彼は横たわっていた。もう一人は……誰だろう？ 見たことのない女性だ。ここやかな笑顔を浮かべているところを見ると、永眠ねむつているのではなく普通に寝ているだけののだろうか。

「彼女はツタのパートナーだよ」

保険医は僕の考えを読んだかのように言った。

「え？ だって、ツタは一人で……」

「それは彼女が永眠ねむつてしまつてからの話さ。ツタも最初はカップルを組んでいたんだよ」

その言葉を皮切りに保険医は語りだした。

「ツタと彼女、ナツはすばらしいカップルだった。他のカップルの十倍もの敵を永眠ねむらせ、それでいて自らが窮地に立たされることは滅多になかった。彼らは思っていることを一瞬で相手に伝えることができた。完全に信頼し合っていたか

異変が起こっているのでは、そんな風に考えた苦肉の策だった。

異変はすぐに見つかった。

まず表情が違った。『世界』に飲み込まれ永眠ねむらされた者は例外なく苦しげな表情を見せる。程度の違いはあるけれど、そのことだけは間違いないはずだった。それなのにナツは微笑んでいた。以前の苦しむ顔とは正反対のやさしげな微笑みを見せていたんだ。

それからナツは例の機械にかけられた。そこでようやく医者たちは探しものを見つけた。

ツタの『世界』はそこにあつたのさ。以前まで存在したはずの、敵兵士の『世界』は消滅していた。その代わりに彼女の核をツタの、強固で広大な『世界』がやさしく包み込んでいた。その上ツタの『世界』は完璧なまでに元の『世界』と同一だった。普通、相手に植え付けた『世界』はオリジナルの『世界』に比べて精度が落ちる。複製品なのだからそれは必



然と言える。じゃあ、何でナツの中の『世界』は完全にオリジナルと同じものなのだろうか。

「医者たちが出した答えはこうだ。」

「ツタは、自分の『世界』を複製したのではなくて、オリジナルをそのままナツに与えたのではないか。その強度でもって、通常では不可能な、植えつけられた『世界』の消去を行ったのだ。かわりに出現することとなったツタの『世界』はナツにとつてとても幸せな場所だったのだろう。そうでなければ、どうしてナツはこんなにも可憐に笑うことができるのだ」

「そこまで一気に言うと、保険医は僕の瞳を、何かを確かめるように見つめた。」

「それが五年前の話さ。見れば分かるとおろ、彼らは今でも生き続けている。どうして一年で死ななかったのかはまだ分かっていない。でも推測はできる。多分、彼らは一切苦痛を感じていないから生きていられるんだと私は思う」

「す」

「その考えが間違っていることを僕はすでに知っている。」

*

「永眠^{ねむ}らされた人物の苦しみは死ぬまで続く、そう思うだろう？」

「はこ」

「それは違うんだよ。現実はもっと酷だ。長い長い夢を見て、起きてみるとまだ眠つてから一時間も経っていない。そういうこと、君にもないかい？」

「そう言われれば確かに」

「永眠^{ねむ}る人たちも同じさ。彼らの時間は僕らの時間とは違う。私たちにしてみれば一瞬であっても、彼らには永遠なのかもしれない。それは私たちにはわからない」

*

「ツタは、生きていけると言えるんですか？『世界』がないってことはもう意識が存在しないってことじゃないんですか」

「『世界』はあるよ。ナツの中に」

「あ……」

「そうだよ。彼らは今も二人一緒に生き続けているんだ」

「僕は何も言えなかった。」

「ただ、あと一つだけ、君には言っておかなければならないことがある」

「え？」

「実は、この手法を試したのはツタだけではない。ツタが成功したあと、多くの人が同じ事を行ったんだ。でも駄目だった。皆失敗した。だから政府はこの事実を隠したんだ」

「……彼らは、どうなったんですか」

「わからない。ただ、とても恐ろしいことになった、とだけは聞いている」

「とても恐ろしいこと……」

「あと君が考えるんだ。私は事実を教

クヌギはもうすぐ死んでしまう。

クヌギの時間では永遠なのかもしれないけれど、僕の持つ有限な時間では確実に死んで冷たくなってこの世から消えてなくなる。

もう僕には時間がない。

*

翌日、僕は人生最大の幸運に感謝する。アイツがいる。

いざ目にしてみると想像していたよりもはつきりと認識することができる。遠目から見てもあの男がアイツであることは間違いない。

ついに見つけた。

鼓動が高鳴る。緊張が高まる。

落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせ、僕は細心の注意を持ってアイツの周囲を探る。どこかにパートナーがいるはずだ。まずは盾役を永眠^{ねむ}らせてからのほうが安全だ。なんと言っても僕は一人だ。

えることしかできない。この先どのような行動を起こすかは君が決めなければならない」

保険医は視線を僕からははずすと、微笑むナツの顔へ向けた。

「成功した彼らは永遠に幸福なのだろうね」

その言葉は僕に向けられたものではないように僕は感じた。

*

クヌギの容態が悪化していると聞いて僕は急いで病室へ駆けつける。

彼女は僕の目にはいつもどおりのように見える。静かに、顔を歪めつつ、永眠^{ねむ}っている。

「永眠^{ねむ}った人はみんなそうやって死んでゆくんですよ」

看護婦はそんなことを言う。

「死ぬ際にそれまで以上に苦しむことがない。それが永眠^{ねむ}る患者の唯一の救いだ。男との攻撃し合いになることだけは避けたい。」

程なくして僕は盾役の少女を見つめる。木陰に隠れながらアイツを真剣な瞳でじつと見つめる彼女。僕にとっては運の悪いことに、彼女の背後に隠れることができるようなものはない。ここは思い切って出て行くしかない。

そろりと姿をあらわにする。音を立てないように、立えないように。一步一歩、ゆっくりと差し出す。丁度良い位置まで近づいて、深く息を吸う。彼女は気づいていない。気は緩めない。もう二度とあの時のようなミスは犯さない。

集中。力を引き出す。集める。槍を形作る。しっかりと握る。

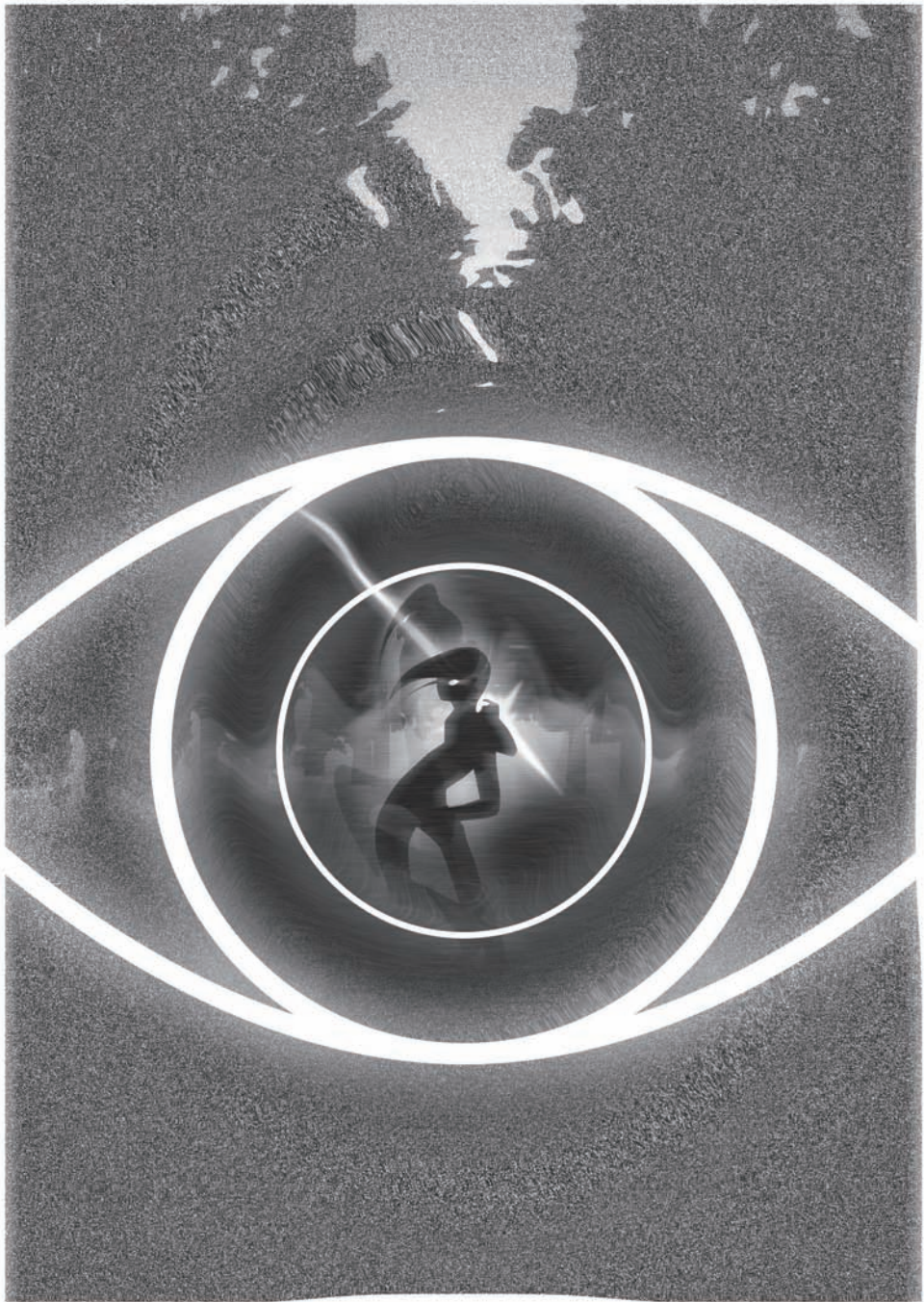
攻撃態勢に入る。

その瞬間不意にアイツが少女の方へ振り向いて、槍を投げる直前の僕を発見する。気づかれた。

かまうものか。もう止められない。

僕は思いっきり腕をスイングする。





ゆったりとした直線を描いて槍が少女の体へ吸い込まれる。

僕と、そしてアイツの見える前でクヌギが静かに崩れる。

クヌギ？

しっかりとろと自分に言いかさせる。敵がクヌギに見えるなんてどうかしている。あれは憎き仇だ。絶対にクヌギであるわけがない。

アイツがすでにこちらへ駆け出している。僕はもう一度すばやく槍を作る。相手は盾を失った。あとは相手より早く攻撃を仕掛ければ僕は勝利する。

しかしアイツは僕のところへ来る前に足を止める。

永眠^{ねむ}るパートナーのそばに跪き、肩を揺さぶって少女の名前を何度も何度も叫んでいるのだ。

僕はその光景を見た瞬間、悟る。悟ってしまって愕然とする。

アイツも僕も同じだ。同じ人間ではない。

だからこそ、僕は少女にクヌギの陰を見たのだ。

槍を消す。静かにアイツの元まで歩いてゆく。

「おい」

僕は声をかける。アイツは反応しない。「見逃してやる」

それだけ言うと僕はアイツに背を向け、その場を後にする。背後から響く咆哮が僕の体を振るわせる。

*

僕は病室へ向かっている。

今日は一日部屋にこもって気を集中させていた。目を瞑り、『世界』の純度が最大限まで高まるようにと思つて瞑想し続けた。

本当は安心しなかったただけだ。

大丈夫。

大丈夫だ。

必ず僕は成功する。絶対に成功する。

信じる。信じ切る。信じ抜く。もう僕には信じるしかないのだ。

*

クヌギは僕の目の前で、いつものように苦しみながら永眠^{ねむ}っている。

深呼吸をする。二度。三度。何度やっても心臓の高鳴りは収まらない。ここが正念場だ。集中しろ。今までの自分が養ってきた全ての集中力を一点に集める。余計な雑念は捨てて、ただ自分がやらなければならないことだけを考え続ける。そうしなければ失敗してしまうに違いないと自分に言い聞かせる。

瞳を閉じる。

今この瞬間においてもまだ不安は消えない。本当にこの方法で良いのか。こうすることが一番正しいのか。自分はどうなってしまうのか。わからない。全然わからない。けれども僕はもう選んでしまったのだ。今更引き返すことはできない。

い。

もういい。この消えない不安だつて僕の一部なのだから、しかたのないことだ。胸の鼓動だつて引き連れて行ってやる。

僕は、クヌギのことを誰よりも理解しているのだから。

そう、それが答えだ。

ゆつくりと僕は念じる。僕の『世界』よ。光となつてこの右手を満たしたまえ。

念じる。

念じ続ける。

右の掌から淡い光が漏れだす。

念じ続ける。

少しずつ光が強さを増してゆく。

念じ続ける。

光が手袋のように薄く右手を覆う。

念じ続ける。

右の掌をクヌギの額に当てる。

さあ、旅立ちの時だ。

光が吸い込まれてゆく感覚。ピリリと感じる痛み。だんだん空になつてゆく頭。クヌギの顔から苦しそうな表情が消え

る。

天を仰ぐ。成功を確信する。

体の隅々まで安心感と喜びが広がつてゆく。

*

保険医は自分の部屋で俯いていた。

本当に、あの少年にツタのことを教え

たのは正しい行いだつたのだろうか。

あまりにもあの少年が賢明だつたから、

私は『道』を示した。

しかし、その『道』は途中で二手に分

かれている。

片方は正しい『道』。もう片方は間違つ

た『道』。

失敗した者がどのような末路を辿つた

のか、実は保険医は知っていた。あまり

に残酷な事実だつたからあの少年に伝え

るのを躊躇ってしまったのだ。

今になつてそのことを後悔する。教え

るなら教えるで、私は彼に全てを教える

べきだつたのだ。

保険医はツタのことを、自分の一番の親友だつた男のことを思い出す。

ツタとナツは本当にお互いのことを分かり合っていた。だからこそツタは成功した。

では少年は？

少年とそのパートナーは本当に理解し

合っていたのか？

保険医は祈る。願わくば、少年の進む

『道』が眩い光に溢れていることを。

*

*

「うううう……」

聞こえるはずのない呻き声が聞こえる。

はつとして僕はクヌギに視線を戻す。

クヌギが悶え苦しんでいる。

「うがあ、ああ、ぐ、ぐええ」

人間とは思えない声を上げてクヌギは

もがき暴れる。

「な、何で……」

思わず一步後退する。

できない。掌がクヌギの額にへばりついて離れない。

「何だよお！」

叫び声は病室に一瞬だけこたえました後、むなしく掻き消えてもう誰の耳にも届かない。

光が消えると同時に、僕の意識が跳ねる。

目が覚めると僕は『世界』になつている。

クヌギのために死力を尽くして磨き上げた僕の『世界』、しかしクヌギにとつては地獄以外の何物でもなかつた『世界』と完全に同一化して、クヌギを包み込み、永遠にクヌギを苦しめ続ける。永遠に。

